

平成14年2月13日 政策秘書座談会

# 官僚依存の政策決定システムを見直す

——政策の問題点とは——

ささき・たかあき

**佐々木孝明**

東京財団研究員 元額賀福志郎衆議院議員政策秘書

まつぎ・ゆたか

**松崎 豊**

保岡興治衆議院議員秘書

さたけ・しげる

**佐竹 茂**

鎌田さゆり衆議院議員政策秘書

おがた・こうじ

**緒方功治**

高市早苗衆議院議員政策担当秘書

民主党の辻元清美政審会長が、政策秘書の給与を不当に流用していた問題の責任を取り、議員を辞職した。鈴木宗男氏の件で問題になっている政と官の関係といい、政策秘書の問題といい、国会議員の政策立案システムは機能不全に陥っているようだ。永田町きっての政策通である政策秘書および経験者4人が集まり、現在クローズアップされている政策担当秘書制度の問題を中心に、政策立案システムの現状について話し合った。

## 「構造的に政と官が癒着している部分はあった」(佐々木)

**工藤** まず、鈴木宗男さんのことで率直な話を聞きたいのです。といっても、彼個人の問題ではなくて、政治家と官僚の関係についてです。みなさんどのようにご覧になっていますか。

**佐々木** 私の感覚からすると、よい悪いは別にして、鈴木宗男さんのケースというのは珍しいケースではないと思います。今回は田中眞紀子さんの「敵役」としてマスコミのクローズアップを受けましたけれども、宗男さんの官僚への対応はごく普通のこと。逆に、国民がそれを許さない環境になってきているのかなと感じましたね。

ただ、与党と野党とではだいぶ違うと思うのです。与党にいたわたしの経験から言うと、全く日常的に“接触”は行われていた。部会というのはあくまでも形式的な場で、裏では頻繁に官僚とアクセスしている。逆にどれだけアクセスができるかによって、その議員の

力量がはかれるという認識があった。

官僚サイドからも積極的にアポイント取りをしてくる。鈴木さんの件では、政治家からの働きかけばかりがクローズアップされていますが、むしろ我々の意識からすると、官僚の側から働きかけてくる場合のほうが圧倒的に多かったように思います。また、組織的に局長なりがしかるべき立場で来る場合と、「個人プレー」として来る場合とがある。どちらが多かったかと言われれば、後者のほう。省益を代表して来るという以外にも、官僚の中の出世争いを含めたいろんなロジックの中で、日常的に政治家のところに来ていたわけです。議員サイドにしてみれば、情報の供給源がほかにないので、官僚に頼りきるしかない。そのように構造的に癒着している部分はあったと思うんです。

**工藤** 実際に、現在、与党代議士の秘書を務めていらっしゃる松崎さんはどうですか。

**松崎** 佐々木さんとほとんど同じ感想です。

宗男さんのやっていたようなことは日常茶飯事。わたしは行政に政治家がなにかを言うことが悪いことだとは思っていません。ただ、宗男さんの場合、報道されている話を聞くかぎりでは、明らかに恫喝ですよ。ね。「なにかを言う」なんてレベルのものじゃない。

**工藤** 小泉内閣では、首相主導という形でこれまでの政党での部会の積み上げとは違う形のアプローチが増えましたよね。官僚はそのどちらに対応するのか、今は二股の状況です。小泉内閣が誕生してから、政治と官僚の関係に変化はありましたか。

**松崎** いや、私は特には、そこを肌では感じてはいない。

**緒方** とりあえず小泉さんによって、官邸と与党の関係が、今までとはちょっと変わってきたかなという気はしますね。従来、官邸と与党はあまり対立することはなかった。

**工藤** そういう対立が起こった場合、政治家と官僚はそれぞれどう動くのか。実態を知りたいですね。

**緒方** 官僚が前面に出てきていた従来型に比べると、今は奥に引っ込んでいるような印象は受けますね。

**佐々木** 現在の政治システムでは、官僚は最終的に小泉さんのサポートに回るようになると思います。政治家も、内閣に入れば首相側につくと思うのですが、実質的にはその他の人のほうが多いわけですね。所属する派閥や派閥の長がどういうスタンスなのか、その中

で自分がどういうポストを与えられるかによって、首相と官僚のどっちにつくかということを見極めているのだと思うんですよ。

例えばわたしがかつて仕えた額賀福志郎さんなどは、「党の行革本部に入ると、逆に派閥の方に若干傾かざるを得ない」などと言っていました。全体として自分はどっちの立場というよりも、身近な自分のポストに応じてそのつど態度を決めていくという生き方をしてきた人なので……。

**松崎** それは小泉首相も同じですよ。例えばこの前は、小泉さんの裁量で大臣を選し、副大臣のチョイスは派閥に投げてやった。国家戦略本部が提出した政治システム改革案では、大臣・副大臣・政務官はチームとして内閣を支えると書きましたが、それならばすべての人選は総理が行なわないとしないし、そのはずだったんです。ただ、政権誕生時の大臣の人選であまりに序列を無視したことをやったものだから、反発を抑えるために副大臣以下は山崎幹事長に任せると。それは止めた方がよいというアドバイスがあったにもかかわらずです。首相は自分が主体的にやる場面と、派閥を大切にする場面をうまく使い分けているように見えますね。

**佐々木** 世論やメディアの反応も見ながらというところもあると思うんですね。そのつど微妙に風を見ながら使い分けてきていると思うんです。

### 「政治家の官僚“丸投げ”は今も続いている」 (佐々木)

**工藤** 政治と官僚の関係を考える場合、官僚

だけの問題を指摘しがちですし、政治家も官僚を批判することが多い。では、政治家は官僚から意識的にも実態的にも本当に自立してそんなことを言っているのか、という疑問があるわけです。例えば、昔からよく言われていることですが、政治家が官僚に質問も作ってもらっているというのは、今も実際あるんですか。

**佐々木** 与党の質問というのは、もともとそういう馴れ合いみたいな部分もありますけれども……。

そうでない場合でも、国会や委員会の所属と、議員本人の得意分野が違うということは少なくありません。たまたま不得意分野の委員になり、そこはあまり興味がないんだよね……という事態は実際にあるんですよね。その場合はもう本当に「丸投げ」というか、一方的に官僚に質問も依存して、日常的には関心分野に力を入れることが多いですね。

**工藤** 官僚が質問と答弁を全部揃えてあげているとすれば、質問する意味がないのではないのですか。

**佐々木** ええ、そうなんです。野党の場合は調査室とか法制局とか、大きな材料提供の場所があるんです。例えば法案作成のときは、各議院にある法制局に資料収集などを頼みます。ところが、ちょっとした資料でも、法制局はわざわざ担当省庁に問い合わせの電話を入れるんですね。すると、その官僚がパーッと事務所に来て……。

**工藤** その政治家が質問するんじゃないかと。

**佐々木** そのとおり。質問や法案を作る前に、関係部署の課長級が飛んできて、「こういうわけでこれはできません」と、先回りして資料を作成し、持ってくるんですよ。

**松崎** しかも法制局の人間は半分くらいが官庁から来ている。調査室の室長は官庁のOBですよ。要するに、国会の中は全部官僚の植民地なんです。社民党の土井たか子さんが衆議院の議長だったときに、そういうしきたりは止めてしまえと言ったんですが、いまだに続いていますね。

**工藤** 政策立案の際に動くのは、結局、官僚だけということですか。

**松崎** 与党と野党では大きく違います。こういう言論NPOとか、外のシンクタンクというのは野党のためにあるのかなという気がするんですね。議院内閣制においては政府と与党は一体ですから、与党は官僚を自分のスタッフとして使うわけです。自民党は、そういった意味では官僚をどんどん使えばいいわけですよね。でも、今はそうになっていないから……。

**佐々木** それが理想かどうかは別だとは思いますが。

**佐竹** 政策立案が、官僚と政治家の枠で決められていく時代というのは、かなり政治家が衰えている証拠だし、要するに官僚が政治家を一種のツールとして牛耳ってきたというふうに理解すべきですよ。官僚というのは、確かに重要な資料とか重要な意見を持っているとは思いますが、それに加えて学者やN

POなどのさまざまな見解や理念を総合して、政治家が政治を行うのが本来の形。そういった情報のコーディネイターの役割を發揮するのが政策秘書の役割なんです。まだその機能を果たすところまでには至っていないという気がするけれど。

**佐々木** そもそも部会という、仕切られた枠組みの中での議論なり答えなりは出るのですが、横断的な議論の場がない。それを議論するためには、当然ほかの分野についての知見も含めて議論しないといけないのですが、そういう訓練もされていないので政策秘書はコーディネイトどころではない。

**工藤** そういうネットワークや横の勉強会はもちろん必要だと思いますが、極端な話、政策をどんどん作る非常に優秀な政策秘書がどこかの事務所に出てくれば、議員間の競争心も芽生え、雰囲気を変えることになるのではないですか。

**松崎** 自分のところの議員が党の幹事長だとか、そういうトップに近いところで政策を作るときはそれでよいのです。が、そうでないときはいくら能力があっても、仲間うちや党内を説得する作業が大変で、とてもではないけれど一議員が独自に政策を立てて議員提案できるようなシステムではないんですね。

**佐竹** 議員提案も法案を一応受け付けただけでも、そのままずっと置いておく。これを「つるし」というのですが、継続審議扱いになったままのものが多。野党提案の議員提案はほとんど審議されない。

**工藤** 与党はどうですか。

**松崎** 議員立法する場合は、党の了承を得て、国対委員長と議運の了解を得て出すことができます。数が多いから、野党の反対は想定する必要がないわけです。

**佐々木** それでも議員立法は全体の1.7%程度なんです。議員がどんどん議員立法して、その党の中のポジションを上がっていきけるようなインセンティブを作らないと。党内の委員会のディベートで勝った議員が、党をリードするシステムを作るべきです。

**工藤** 塩崎恭久さんや渡辺喜美さんはそういう苦境の中でもかなり政策提案力をつけましたよね。マスコミでの登場回数も増えていますが、しかし、それが政策として動くことはない。

**佐竹** むしろ、それは逆ですよ。国会の委員会というのは、国会議員と国会議員、政治家と政治家が政策や理念をぶつけ合う場だという錯覚がある。ところが、実際は党の中でさえも、議員同士がガンガン議論して練り上げられたものが出てくるケースは非常にレアです。部会などでは族議員的議論しか行わない。国会議員同士がガンガン議論した結果、政策が出てくるというのは錯覚で、実はそれができないから渡辺さんや塩崎さんは外でやるわけですよ。

**佐々木** 委員会でも発言は出ますが、政策と政策が真正面からぶつかるようなディベートにはならないですよ。塩崎さんなんかは、この人たちと議論してもしょうがないと顔に書いてあるわけですよ。残された方法として

は、外でメディアに出て実力をつけるしかないわけです。外でしている議論が党内にフィードバックされることはほとんどありませんが。メディアで力をつけることが、党の中の階段を駆け登ることにリンクすれば、塩崎さんや渡辺さんのような人はもっと出てくると思います。

**「小泉さんは自民党を全然、壊していない」  
(松崎)**

**工藤** 部会には族議員の議論しかないとなると、党としての戦略はどこがくるんですか。今のような状況ですと党の存在意義が問われるような局面にあると思うのですが。

**松崎** だから今、国家戦略本部のように、総合的なビジョンを描くところを作ろうという動きがあるわけです。

**工藤** それを実現するためには、その国家戦略本部も党の意思決定システムとして認められる必要があります。戦略本部が何かを発表しても、党の実力者が公然と批判している。それでは、自民党が本当に戦略本部の提案のとおり動いているのか分からない。小泉首相が「わかった、おまえらに一任するからやってみろ」と言う必要があります。

**佐竹** 僕はむしろ、総理・総裁を目指す人が戦略的なものを持っているべきだと思っています。言い方を変えると、戦略を持っていない議員は総理・総裁にしないというような原理が党に働いていればいいわけです。あるいは世論でもマスコミでもいいのですが、そういう戦略的・国家的な立場を持っていない

ような首相候補が出てきたときに「けしからん」と叩けばどうということはないんですよ。ところが、現在の日本のマスコミもみんな派閥にぶら下がっているから、そういうことが議論できない。

**工藤** そうした国家戦略、例えば外交などはどういう形で小泉さんは決めているのですか。

**佐竹** ほとんどカンでやっているんじゃないですか(笑)。

**佐々木** でも、外交は行政ですから総理が独自に決めることではありません。

**工藤** いや、外交の実務はそうだけれども、外交そのものは基本的に政治主導です。例えばインドとパキスタンをどうするかというのは、官僚が決めることではないですよ、政治が決めることでしょう。

**佐々木** もちろん。議院内閣制の下では与党の信任を得た総理が独自性を発揮すればいい。ただ、政策の実現については、やはり議会での数の力というものがどうしても必要になる。党内での多くの賛同者を集められれば、それによって自分の政策というものを国政に反映することは可能です。

ところが、今は機能不全に陥っているから、だれが今この国を動かしているのかということが見えなくなってしまっている。小泉さんというリーダーシップのある総理が出てきたことによって、ようやくこの国の旗を振っている人の姿が見えつつある。

**工藤** それどころか、小泉さんは自民党を壊

すと宣言したわけですよ。ハッキリ言って壊したんですか。

**松崎** いや、全然壊していない。

**工藤** 全然ですか。

**松崎** 小泉さんは自民党を変える、日本を変えろと言っていた。ところが、みな「小泉さんを支えよう」と言う前に、今までの常識を超える組閣をしたものだから、ショックが強すぎてそれどころではなくなった。そんなわけで、小泉さんは今もあくまで自民党内の少数与党。政党を変えるまでのエネルギーはないような気がするんです。

**佐々木** 小泉さんの登場によってかなり雰囲気は変わっているとは思いますがね。従来型と比べると、組閣のやり方から違ったり、政策の進め方にしても確かに官邸主導で前に進んでいる。ただ、政策決定をインプットとアウトプットに分けたときに、アウトプットのスタンスだけを変えても効果は薄い。どういふ情報がどうやって入ってきてというインプットのほうも変えないと。政策決定を一元化するための制度設計を上手くやらないといけない。

**工藤** 政策決定の一元化ということでは、政府の提出法案についての与党の事前審査の廃止問題は結論が出たのですか。

**松崎** いや、まだ議論は継続しています。

**工藤** テレビを見ていると、野中広務さんが「だったら党議拘束はもうやらなくていいん

だな」と、逆にすごんでいますよね。これは恫喝ですが、では実際にやってみればいい、と思います。そうなれば、結果的に解散・総選挙ということになるかもしれない。開示された形で国民に問うことにより、実験が行なわれる可能性は生まれるわけです。野党の秘書の方々は事前審査の問題をどうとらえていますか。

**佐竹** 議院内閣制という制度からすれば、事前審査制は明らかにおかしい。そのことをふまえて、小泉さんは内閣の組閣の仕方などに見られるように、すでに現行の制度を壊しはじめているわけですよ。それこそ自民党の部会是非常に不愉快だろうけれども……。

野党もそれができればもっと面白いということなんでしょうが、自民党と同じで、旧来のシステムが一気に崩れてしまうのはやはり怖いのです。民主党の中にも部門会議がありますから、事前審査制を要求するような、一種の「族議員」というのはいます。ネクストキャビネット(NC)で決めたことが部会で、それこそ族議員的な反応で跳ね返されることはたくさんありますよね。

民主党は今のところ野党だし、若い議員が多いから、自民党よりましとは言えるけれども、自民党と全く違った構造をもった党だというふうには絶対に言えない。党議拘束を与党が外したときに、野党も当然外すというふうになれば、それは本当に一番よい政治改革のスタートだと言えるでしょうね。でも、3与党が一枚岩であるうちに、民主党が党議拘束を外せるわけではないじゃないですか。

**松崎** ここまでシステムができ上がってしまうと止めるのは難しいかもしれない。慣習とか長年の慣行ほど変えるのは難しいというの

は、それが今まで上手く機能していたからこそ変えられないという考え方もありますし……。

**佐々木** 確かに。カール・シュミットの言うように、議会制というのは本来自由主義であって、政治家個人の言論の競争によって、その議会の中の大勢が形成されるのです。しかし、残念ながら日本にはそれが根付かなかったと言っていいのではないのでしょうか。

**佐竹** もともと政治改革とか政治変革は野党がやるものではなくて、必ず与党の崩壊から始まるんですよ。それはもう、古来そうです。野党はいるけれども、与党とか主流が分裂するときこそ本当の改革が起こるわけです。今回だって同じですよ。

**佐々木** 派閥の中での序列で、部会で何期やれば委員長になって、その後大臣になる、というシステムが完璧に壊れてしまえば、改革はおのずと進んでいくのでしょうか……。自民党の若手議員に比較的首相公選制論者が多いというのは、そういう意味で期待してよいかもしれません。結局、既存の党の中で序列の階段を一步一步上っていくのでは、いつまでたっても総理になれない。能力はあるけれども行き詰まっているという人が、首相公選制というツール、あるいはバイパスを使って、短縮的に上り詰めたいたいと考えているわけですから。

### 「議員が国政調査権をもっと自由に使えるといい」(緒方)

**工藤** 政策秘書の役割について、もう少し考えてみたいのです。官僚に依存していた国会

議員が、自分のスタッフだけを用いて、独力で政策を作ることは難しいのでしょうか。

**松崎** そういうシステムにはなっていない。

**工藤** やっぱり官僚に依存しないと難しいですか。

**佐々木** すべて「丸投げ」というのはまずいけれども、そもそも与党と役所は一体となって政策を実現していくことになっていますから。

**工藤** 官僚が複数の案を出し、それを政治家がチョイスするというシステムが本来の姿だと思うのですが。当然チョイスするときには、それなりの見識や状況判断とかいろんなことを知らなければいけない。なにも知らない政治家が「お前、今度やったらいいじめてやるぞ」なんて官僚をこき使うのは、やはりおかしい。

**佐竹** 民主党は結構、学者を呼んだりNPOを呼んだりして勉強はよくするんですよ。でも、学者をただの飾りに使う人が多いんです。もちろんこれは人によって違いますけれど。政策秘書というのは、役人の資料とか法律も含めて、集まってきたものをコーディネートする存在として自らを位置付けない限り、まったく役に立たないんですよ。

**工藤** アメリカみたいに、役所の人たちが政策秘書になったりまた戻ったりとか、そういうフレキシブルなシステムを構築するのが近道ではありませんか。

**佐々木** それだと、結局、ますます霞が関と永田町の癒着が強くなるような気がしますけどね。

**佐竹** 例えば、今回の公務員制度改革案の中で面白いのは、幹部職員を年俸制にして、意欲と能力をもつ者を広い層から獲得するというくだり。では民間人も入れて任用してよいのかということ、それはだめという。少なくともそのあたりの思考改革をしなければ、官僚問題は解決しないわけです。

**工藤** 自民党サイドでは今の話はどう思いませんか。

**松崎** 大部分の人は政策秘書がコーディネイトし、議員が政策を選択するというシステムに慣れていない。すごい人が国会議員になったり、秘書だったりするのかなと思って想像してこの世界に入ってきたわけですが、もう大したことはないわけですよ。あまりにも官僚に依存してきたというのがあって、さまざまな角度から見ると訓練が圧倒的に足りない気がする。

**緒方** それもそうですが、まず政策秘書の数を増やしてもらいたいですね。また、政策立案の部分に関して言えば、情報を役所が独占していて、一次的な情報を得る手段がないという現状を変えねばならない。

情報公開が進み、インターネットで議事録なども取れるようになりましたが、もっと細かいデリケートな情報というものに関して自由に取れる方法、議員個々の調査権能というのが脆弱だなと感じます。国政調査権をもっと自由闊達に使えるといいと思います。官僚からの情報に依存しない、独自の情報入手のツールをもてるという国会機能があれば、かなり意識は変わると思いますね。今は、

立法府と行政府の数のハンデを埋めることができる、せっかくの「伝家の宝刀」を、あまりに抑制的に扱い過ぎている気がします。

**佐竹** それに、社会経験のない人が大学を卒業してすぐ政策秘書になり、公務員なら課長級に値する給料をもらうというシステムにも疑問の声があがっている。

**工藤** そのお金をピンハネすることも行なわれている。

**佐々木** 当然ピンハネするわけですよ。自主的に事務所に払うという形はとりますけれども、半ば強制的な場合が多いですね。新卒の22歳に何で40万円以上も払うんだという話になって。ピンハネされているほうも、同級生たちを見たらみんな20万円ぐらいしかもらっていないから、これは当たり前じゃないかと思ってしまうわけですよ。

### 「政策秘書廃止論が高まっていくのが怖い」 (佐々木)

**工藤** この討論を企画する段階ではまだ、政策秘書の議論が話題になっていなかったのですが、その後、辻元清美さんの政策秘書雇用に関する問題が出てきましたよね。これをどのようにご覧になれますか。

**佐々木** 私が最も懸念しているのは、辻元さんの問題を契機にして政策秘書廃止論が本格的に高まっていくのではないかということです。

**工藤** どういうことですか。

**佐々木** 辻元さんは記者会見で、元政策秘書には電話で相談に乗っていただいていたと言っていました。政策秘書の仕事って電話でできるようなことなの、と世の中の人には思っちゃうわけです。そんな政策秘書ばかりだと税金を払うのはいやだと。

**松崎** 同感ですね。辻元さんは元政策秘書に陳情の処理についてのアドバイスも受けていたと言っていますが、そもそも陳情の処理が政策秘書本来の仕事かどうかはともかくとして、少なくとも電話でアドバイスできるようなことではないですね。選挙区が大阪（辻元氏）と沖縄（照屋氏）では環境が違いすぎるわけですし。

**緒方** 政策秘書の仕事を完全にこなそうとしたら、それこそ24時間、平日・休日問わず、家庭も顧みず（笑）、働いても足りないくらいですね。だって、国会議員自身がそうなのですから。アルバイト的に政策秘書が務まるわけではないです。

**佐竹** 僕はさっき議員どうしの政策論争がないと言いましたが、テレビなどで激しく与党議員とやりあってた辻元さんでさえ政策秘書をないがしろにしていたわけだから、国会議員が政策というものをどのように考えているかが分かるというものです。彼女が「政策審議」会長なんです。いわんや他の政治家をは、ですね。

**工藤** さきほど、政策秘書の給与水準のことが話題に出ましたが、今回の辻元さんの問題で、1000万円前後といわれる政策秘書の給与はやっぱり高いのではないかと、という受け止

め方があります。それについてはどう思われますか。

**佐々木** 確かに報道を見た人はそう感じるかもしれませんがね。私も民間企業にいましたから、その感覚はよく分かります。でも、客観的な評価はなかなか難しいにしても、給与水準に見合うだけ、あるいはそれ以上の仕事をしている人がいるのも事実です。そういう良い事実はなかなか伝わらないのですが。

**松崎** 給与水準が一律同じというのも問題かもしれませんがね。経済や学問の一线で活躍している、本当に優秀な人を政策秘書に雇おうとしたら、1000万円では少ないかもしれません。私知っている例では、金融問題などの政策に明るい自民党有力議員の政策秘書をしていた人は、政策秘書になる前は証券会社において、年収2000万円を稼いでいたそうです。それを半分にしても、政策立案の仕事に魅力を感じて入ってきたのです。今必要とされているのは、能力のある人に対して相応の報酬を与え、政策秘書という仕事に魅力を与えることではないかと思っています。とはいえ、今の状況で政策秘書の給与を増やすことは、頭数を増やすのと同じくらい難しいでしょうけど。

**工藤** 辻元さんは公表した文書のなかで、何人かの実名を挙げ、他の議員も政策秘書の「名義貸し」をしていることを告発しましたね。

**佐竹** だからといって辻元さん自身が責任を免れるわけではないよ。ただ、彼女以上にヒドイ状況が横行しているのも事実。この際、戦後の公職追放運動ではないけれども、すべ

て洗いざらい明らかにしたほうがいいかなと思っ  
ています。

**佐々木** でも、それを本気でやったら、議員  
はいなくなっちゃうのでは。

**佐竹** いや、1割ぐらいは残るのではないで  
しょうか。冗談はさておき、それほど深刻に  
受け止めるべき問題だと思いますよ。政治シ  
ステム全体の問題なのですから。

**佐々木** 政策秘書が機能していない要因の一  
つとして、法律上の身分規定がないことがあ  
げられる。要するに政策秘書は何ができて、  
何をしないとイケないのかという法文上の規  
定がないんですね。

**佐竹** 政策秘書と名乗っているものが全部同  
じだと見えてみると、まず混乱が起こるん  
ですよ。

政策秘書には第一期の国家試験で受かって  
きた「資格組」と、例えば上級国家公務員や  
公認会計士の資格を持っていることで秘書の  
資格も認められる「認定組」というのがい  
るのです。最初の年は、これが40人か50人  
いました。しかし、国会議員は800人近くも  
いるわけだから、ほかの人はどうするんだ  
ということになる。それで、いわゆる「研修  
制度」が生まれた。これは10年以上公設秘  
書をやっていれば、研修を受けるだけで  
政策秘書になれるという制度ですね。

だから、政策秘書は大まかにいうと2種類  
いることになる。確かに政策を勉強したとか、  
訓練したとかという人もいれば、公設秘書  
を10年やったという、いわば秘書の先輩だ  
から政策秘書になったというだけの人もい  
るわけ

です。しかも、公設秘書から政策秘書にな  
ったの方が圧倒的に多いんですよ。恐らく  
8割以上、9割近いでしょう。政策担当とい  
っても内実はこんなものなんです。

それからもう1つ。例えば、現在の政策秘  
書よりももっと優秀で、あるいは力のある年  
配の公設秘書を雇おうとしても、資格がない  
人は政策秘書にできないんですよ。そうなる  
と他の公設秘書を切りざるをえず、事務所  
内の序列が狂ってしまう。これは非常に煩  
わしいですね。そこで政策秘書制度はなくな  
った方がよいという議論が出てくるわけ  
です。

**工藤** なくした方がいいというのは政治家か  
ら出ているんですか。

**佐竹** そうですね。もともとホンネとして  
は、公設秘書を2人から3人にふやしたい  
という願望はどの議員からもあったん  
です。ただ、それはそのままだとふや  
せないで、建前としてその政策立案機  
能を強調して政策秘書制度を創った  
んです。

**佐々木** でも、政策でのし上がりたいとい  
う議論の人は、むしろいい人材を政策  
秘書として雇いたいと思っている。でも、  
今のところ政策秘書には職業として魅  
力がないので、シンクタンク、研究  
者、あるいは官僚などにいる有能な  
人材が移って来ないということ  
ですね。

**工藤** ということは、まず「研修制度」  
を止めたらいいのではないですか。

**佐竹** そうだと思いますね。ところが、  
最近では「プール制」といった議論が  
なされてい

る。アメリカがやっている、「これだけの予算をあげるから、その範囲内だったら、何人雇ってもいいですよ」というシステムのことなんです。それを無理やり当てはめようということが自民党からも、うちの党からも出ている。今までは、年間3人分合わせておよそ3400万円だったものが、年俸600万円ぐらいの秘書なら5人は雇えるという計算をしている。政策を作りたいという議論とはほど遠いわけですよ。まあ、それがすべての理由というわけではないでしょうけれども。

**松崎** 公設秘書のなかには、政策秘書の免許も取っている相当優れた秘書さんがいっぱいいる。それなのに議員に採用されないと政策秘書の免許が機能しないという制度はおかしいですよ。

**佐々木** そうですね。確かに政策秘書の身分は議員次第なところがある。あまりにも身分が不安定なので、政策秘書というのは兼職禁止の規定がないんです。私の場合は、そのリスクヘッジとして、はじめ日本総研を休職して政策秘書をやっていて、1、2年勉強して戻ろうと思っていたのです。結局は、政策秘書の仕事が結構面白かったので、途中で日本総研も退職したのです。

**松崎** 私も、もともとは民間にいて、一時出向していたのですが、やめて私設秘書になりました。だから、将来は、先生が落選したらどうしようかなと思って……。

**緒方** 私は法律家になりたかったんです。学生時代は司法試験の勉強をしていたのですが、卒業して3年目か4年目にこの制度ができ

るという話を聞いて、法律を作れるということに魅力を感じましたね。法律に対するクリエイティブなアプローチという意味で。

**工藤** 佐竹さんは秘書になられる前は何をやってたのですか。

**佐竹** 民間の会社にいました。僕は、まあ、そういう表現をすると悪いんだけど、53歳か54歳のときに、定年後の仕事を何か探さなくちゃと思ひまして。ちょうど政策担当秘書の国家試験があるというので受けて、資格だけ取っておこうと思った。合格者数が少なかったせいもあって、すぐに議員の声がかかったという、それだけの話ですよ。

**工藤** まず人を増やすという案は、1人を政策秘書、そのほかに政党から1人を政党助成金で党が採用して議員に派遣すればいいじゃないですか。それで2人となる。

**佐々木** そういう話で言えば、委員会がありますよね。財政金融なら財政金融委員会に関係者の議員が何人も入っているわけですから、そこに政策スタッフだけ集めて議論すれば、人数は要らないではないかという意見もあるんですよ。

**工藤** 何か企業のリストラ的な話ですね。

**佐竹** まあ、しかし、現在いる政策秘書がほとんど政策秘書として機能できず、機能させる気もない事務所が大半を占めているときに、もう1人増やすとなると、世論の袋叩きに……。

**工藤** 政策秘書を機能させたいと思わない議員がいるというのは、ちょっとおかしいのではないですか。

**松崎** おかしいから、淘汰されなきゃいけないんですがね。

### 「政策秘書問題は政治構造見直しの絶好の機会」(佐竹)

**佐々木** ちょっと気がかりなのは、最近の政治がらみの動きがあまりにも急速で、今回せっかくクローズアップされた政策秘書制度問題が置き去りにされることです。

**松崎** その懸念は確かにありますね。中島洋次郎さんの時も山本譲司さんの時も、それ以前から政策秘書制度についての問題点は指摘されていたにもかかわらず、いっこうに見直されていないわけですから。今回もそうなってしまっただけは元も子もありません。

**佐々木** メディアの問題もあると思います。昨年、小泉純一郎さんを筆頭に、真紀子さん、宗男さん、そして辻元さんと、個性が強い役者が次から次に舞台上に登場し、また退いていきました。小泉さんは今が正念場ですけどもね。しかも、主演者の入れ替わりのサイクルは速くなるばかりです。その一方で、肝心の政策や制度の問題がドンドン棚上げされていっているわけです。ここで一度立ち止まって、根本的な構造問題を議論すべきです。

**佐竹** 政策秘書制度の問題は、今の政治構造全体を見直す絶好の機会になるかもしれません。政策秘書制度については、あまりにも理

想と現実のギャップが大きい。その点では、衆目の一致するところだと思います。

そこで、今後の方向性については2つに分かれます。理想を現実近づけるのか、現実を理想に近づけるのか、です。政策秘書廃止論や「プール制」の採用は前者ですね。この動きが高まっています。でも、僕は後者の立場をとるべきだと思います。政治家の政策立案機能をいかに高めるか、そういうポジティブな視点に立って政策秘書の役割を見直すべきですよ。

**松崎** その通りですね。現に、理想的な状態で働いている政策秘書もいるわけですから。たとえほんのわずかといえども……。

**佐々木** 社会経験を積んだ結果、公の問題に関心を持つようになり、実際に公共政策を作ってみたくなる人は少なからずいます。政策秘書制度は、そういう人に開かれた数少ない道です。官僚は新卒採用が基本ですから、社会人になってからなろうと思っても難しいのが現実。あとは政治家になる以外、政策立案に直接たずさわる方法は残されていないんです。国会議員の政策レベルを上げるためにも、道を閉ざしてはいけないと思いますね。

**佐竹** そのためには、われわれ現役を含めた政策秘書経験者が、国民に政策秘書の実情を率直に伝えるとともに、これからどういう制度にしていくべきかについても具体的な提言活動をしていかないとはいえないわけです。

(司会は工藤泰志・言論NPO代表)